

# 朝河貫一の日記に表われた 国際化時代の日本

1917 - 1919年

増井由紀美\*

## ASAKAWA Kan'ichi's Homecoming as a Cosmopolitan: 1917-19

Yukimi MASUI

ASAKAWA Kan'ichi (1873-1948) who left Japan for the United States as a student in 1895, lived in New Haven most of his life as a scholar. He received a BA from Dartmouth College in 1899 and a PhD from Yale University in 1902. He started his career as a lecturer at Dartmouth in the same year and was a professor emeritus of Yale when he died in 1948. He came back to Japan only twice in his life, once in 1906 for one year to collect Japanese books for Yale University and for the National Diet Library and again in 1917 for two years to research documents at University of Tokyo and at various temples and shrines. Asakawa, like his contemporaries, wrote a diary as a habit. Although some might have been lost, those written from 1900 to 1925 and from 1940 to 1948 have been kept in the Sterling Memorial Library of Yale University. Using the

---

\*ますい・ゆきみ：敬愛大学国際学部助教授 アメリカ研究

Associate Professor of American Studies, Faculty of International Studies, Keiai University.

diaries written in the period of his second homecoming as a primary source, I focus on Asakawa as a cosmopolitan in his native land. I hope this study may reveal some international aspects of Japanese society during the Taisho era, as well as some unknown facets of Asakawa himself.

## はじめに

阿部善雄（1920 - 1986年）著『最後の「日本人」』が、出版された朝河貫一の伝記<sup>(1)</sup>としては最も詳しいものである。しかし、本書は研究書の体裁をとっておらず、用いた資料についての記載が殆どないので研究資料として扱うには限界がある。但し、序文に、1950年代に日本の学界とイエール大学とが朝河貫一著書刊行委員会を結成したこと、及びイエール大学図書館東アジア部長金子英生に資料提供されたと記載されていることから、同大学スターリング図書館に所蔵されている「朝河文書」(Asakawa Papers) が用いられているであろうことは推測できる<sup>(2)</sup>。

伝記は1874年8月7日、母親に背負われて二本松（福島県）を後にする生後8ヵ月余りの朝河が1948年8月11日、およそ半世紀を過ごしたニューイングランド<sup>(3)</sup>の地でその生涯を閉じるまでを300ページ程にまとめたものであるが、その内、朝河の第2回目の帰国に関しては十数ページが割かれている。

この部分を要約すると、1917年7月5日横浜港に着き、10年ぶりに日本の土を踏んだ朝河は、まず横浜の平沼延次郎末亡人邸に宿泊<sup>(4)</sup>。東京に移動し7日には研究の拠点となる東京帝国大学の三上参次を訪問。最初の1年間は、麹町区中六番町の白井新太郎邸に滞在。9月17日に同史料編纂所で研究態勢に入るまでの2ヵ月余りは、小田原の白井家別荘や伊豆長岡の高田早苗の別荘に滞在しながら、早稲田時代の恩師、友人、そしてキリスト教関係者と会う。史料編纂所では黒板勝美の古文書室に机が与えられ、「東寺百合文書」及び「東大寺文書」の調査にとりかかる。朝河の調査は古文

書室にとどまらず、武蔵野や鎌倉を散策したり、立川や八王子に出かけたり、また足利学校を見学したりした。一人で行くこともあれば、学生や史料編纂所の所員と一緒にすることもあった。講演の依頼も多く、キリスト教伝道士講習会では「鎌倉時代中期の宗教と社会」と題して<sup>(5)</sup>、YMCAでは「大戦中におけるキリスト教の英仏への影響」、東京帝国大学歴史科学生の読史会では「比較法制史学の価値」、柳田国男も同席した丁酉倫理会では「社会史と宗教史にたいする観点」、ジョン・デューイやモリス米大使列席の会では「神道の社会的考察」と題して講演し、津田塾大学では卒業していく学生に対して「住吉物語」についての話をした。東京帝国大学からはアメリカ講座の講師の話が持ち上がり、早稲田大学からは欧州法制史の講義をしてくれないかとの依頼が入る。また、朝河の交友関係は各界に及び、日本に到着してすぐに催された帰一協会の宴を皮切りに、東京帝国大学による会食、実業之日本社の晚餐会、慶応義塾大学の鎌田塾長による園遊会、史料編纂所の忘年会（朝河の誕生祝を兼ねる）、早稲田大学の哲学会の歓迎会、史料編纂所の新年会、ラングドン・ウォーナーや柳田国男との会食、日本イェール大学会との会合、英国国王名代コンノート殿下の歓迎会等に招かれている<sup>(6)</sup>。

では以上は具体的にどの資料に基づいての記述であろうか。「朝河文書」は67箱から成り、そのひとつに、朝河自身の手による日記目録が収められている。朝河は古文書を調査する際には目録を作成して整理していたが、自らの日記に対しても同じ手法をとった。日記そのものには心の吐露もあれば、細かい風景描写もあるが、目録の役割は日時、場所、人、そしてその日の主だった行動や行事を正確に記すことである。私は朝河の手書き英文目録をタイプアウトし、その中身について朝河研究会で報告したことがあるが<sup>(7)</sup>、たとえ詳細な説明はなくとも朝河の行動や交友関係が日を追いつながりながら確認できるのは興味深い。日本滞在期間の箇所を読み比べると、阿部がこれを用いたのは明白である。日本語で書いてある記録に関しては日記そのものを読んでいることが確認できる部分もあるが、大半が英語で書かれている日記全体に目を通した形跡は見えてこない。つまり阿部の記述は

詳細に欠けるのである。また、翻訳に関しても不正確な部分がある。断片的な情報を文章化する際に生じたと思われる間違いが見受けられる。日記と照らし合わせると明らかであるが、本稿ではこの点を押さえた上で日記<sup>(8)</sup>そのものを原史料に、朝河にとっては最後の日本滞在となった1919年9月までの2年間で、主に交友関係を中心に見ていくことにする。そうしながら、朝河を同時代人の中に位置づけることを試みる。アメリカに居を置いた日本人歴史家の体験した1910年代終わりの日本滞在記は、朝河の個人史研究にとどまらず、文化史的研究にも役立つと考えるからである。

## 横浜に降り立つ

1917年7月5日午後2時頃、朝河を乗せたエンプレス・オブ・ジャパン号が横浜港に到着する。下船すると朝河は人力車に乗り込み、長旅の友となったプロスペロ(Prospero)に道中の街並みを説明しながら彼をホテルまで送り、一緒に食事をする。プロスペロはイタリア人の海軍将校で、日本から購入した船舶の受け取りのため神戸に向かう途中だと言う。朝河は2年前の夏、約2ヵ月の間、カプリを中心にイタリアで過ごしており、その時の日記に船がナポリに着いた翌日に伊英辞典を購入したことや、片言のイタリア語でやりとりをしながらやっとホテルに辿り着いたというエピソードが記述されていることから、流暢でなくとも、イタリア語をある程度は解せたことは推測できる。それに、何よりもカプリの自宅に朝河を招待したイタリア出身の友人ダイアナ・ワッツ(Diana Watts)に対する親愛の情から<sup>(9)</sup>、イタリア及びイタリア人に対してことのほか強い親近感を持つ朝河である。日本語も英語もたどたどしいプロスペロを、そのまま放っておくことはできなかったのであろう。

帰国して最初に訪ねたのは、平沼夫人である。ニューヘイブンに朝河を頼って来た留学生、平沼義太郎の母親であるが、日本滞在中、家族のような優しさを受けることになる<sup>(10)</sup>。義太郎と朝河との関係については後に触れるとして、さて、日記からは長旅の疲れは一切感じられない。「6日、平沼夫人邸で義太郎の弟、そして中村と食事をする」とあり、「同日、宗形の

家族に会う」と続く。中村とは、朝河の出身である早稲田大学文学科の後輩、中村萬吉であろう。イエール大学に留学し民法を学んでいた彼は、平沼が朝河を訪ねた頃、朝河と同じ下宿であった。6日は東京への移動日に当たり、親戚である宗形の家族への挨拶も予定していたので、平沼邸に、そう長居はしなかったはずである。

以上は帰国第1日目の日記からの詳細だが、6月21日からの船旅の期間に関しては、日々の記録というよりも、到着した7月5日までをまとめて記述している。只、上記引用した平沼邸での食事に関する部分、及び、宗形の家族に会う部分は6日の記録である。

阿部善雄による「平沼延次郎未亡人邸に宿泊したのち東京に移り」<sup>(11)</sup>という記述は、この日記にはない。一方目録も、「7月5日横浜に到着。平沼夫人、義太郎の母；宗形の家族」という1行だけであり、阿部がなぜ平沼邸に宿泊としたのか疑問が残る。日記によると5日は旅館に泊まっている。「今日の宿のタマヤ（横浜港町5丁目）はかなりみすばらしいが一泊ぐらいなら我慢できよう」と記されている。

翌日は車で東京に移動する。車中、ジャワから着いたばかりというオランダ人の旅行者たちと言葉を交わす。宿泊先はステーション・ホテルである。空き室はないと言われたが、しばらく待っていると、設備の整った部屋が1泊3円50銭であてがわれた。ホテルから友人等に電話をかける。朝河はこの日、気候に関しては只「暑い」と一語だけ記しているが、乾燥したニューイングランドと比べて湿気の多い東京の夏に、懐かしさを覚えていたのかもしれない。

### まずは史料編纂所より：三上参次

東京に着いた翌日の7月7日、朝河は早速、文科大学史料編纂掛（東大史料編纂所）事務主任の三上参次（1865 - 1939年）を訪ねる。この肩書きは今日で言うところの所長に当たり、三上は1900年4月から1919年7月までこの職にあった。朝河の帰国の目的は史料編纂所での調査研究であるから、まずはここから始めるわけだ。『大化の改新』<sup>(12)</sup>を学位論文とし、日本の封建

制度の研究をしている朝河にとっては訪れなければならない場所である。朝河は歴史研究の基本はまず原史料にあり、と考える学者であったが、それは三上に宛てた手紙にも明らかである。その控えを一部引用してみよう。ここには歴史研究のあり方のみではなく、在外知識人としての役割を果たそうとする思いも綴られている。1912年1月20日、朝河は次のように記す。

「我等海外ニ在って日本の史を論著する者は（材料の乏しきてふ不便あると共ニ）日本の旧思想等に掣肘せざる利便あるを感候。……日本よりも欧米の学者に注目せられ比較史学の資材となるを得候。又此の如く世の識者ニ訴ふるにおいてハ、自然ニ（細事を論ずるにも）広大の着眼点より論せざるべからず。日本読者のみの独り合点の見地を離れて、人類社会発達の法式といふ見地よりせざるべからず。是れ論著の性質より来る一良結果に候。従ひて又日本ニて他人の研究せるところを焼き直して欧文ニて書く如きことを為さずとも、根本材料につきて右の如き見地より研究して日本にては得るに難かるべき新鮮の結果を得ることなきにあらざるべく存候」<sup>13)</sup>。

この時期の朝河はアメリカの学会において歴史家としての地位を築きつつあった。研究業績の内、最も高い評価を受けていたのは1904年11月出版の『日露の衝突』<sup>14)</sup>で、戦争当事国の者が抱きがちな一国中心主義に陥ることのない「広大の着眼点」を持つ研究者として、アメリカ東海岸の各団体から講演を依頼され、また新聞への寄稿を求められていた。その後日本では1909年に『日本の禍機』を出版し、帝国主義的外交へと向かう日本政府及び国民に向かって警鐘をならす在外知識人として知られることとなり、イエール大学においては、翌年大学院の日本文化史助教授への昇進が決まり、研究者としての地歩を固めつつあった。

拙稿「朝河貫一の講義」<sup>15)</sup>で、朝河が真理探求のために研究職を選び、講義においてはできる限り原史料に沿ったものをと、日本語を解さない学生に古典史料などを翻訳の形で提供し、受講者には客観的な事実に基づいた論文を要求した教師としての側面を紹介したが、原史料を扱う意義について、1912年3月24日、三上宛の手紙（控）では次のように述べている。ま

ず朝河は原史料は単に用いられるだけでは意味はなく、批判分析が施されて初めて生きるものであると主張する。日本から送られてくる雑誌に掲載された論文にはそれが欠如していると憂えながら、「原料八史二あらず、原料の蒐集の終はる所、即ち史学の始まるところと承はり候が、その史学八原料の内容の按排の如きことは初歩といたすべき義二存候」<sup>16)</sup>と続け、発表の後には学者間で批評し合いながら互いに高め合うべきであると主張する。

さらに朝河は同書簡において、日米通商条約締結時の外交文書に関するワシントンの公文書を史料編纂所から出版してはどうか、ワシントンまでの旅費やタイプなどにかかる経費を提供してくれれば他の報酬の必要はない、出版の際に編纂者として名前が掲載されればそれで良いと、幕末の米国側の文書の蒐集及び出版を提案する。そしてそれに携わる学者としての資格を証明する業績として、『日露の衝突』をあげ、「かの一書の基となれる文書の数は日英米仏数百至数千に及ぶべく存候」<sup>17)</sup>と外交文書等、原史料に基づいた研究書であることを示す。学者の責任を担うものとしての自信がここに読み取れるが、それから4年後、「原料の蒐集」のための研究休暇を日本で過ごすことになる。

1916年10月、帰国を8ヵ月後に控えた朝河は、書面にて研究の拠点となる史料編纂所の三上にその目的を明確に示す。史料蒐集の具体的場所についての助言を求めると同時に、「又皆此等文書が史料にて写し置かれ候や。又写し置かれても、原物を見る方がよろしく候や」<sup>18)</sup>と原史料へのこだわりを強調している。

調査の範囲は、鎌倉時代に武士が荘園に入ってきたあたり、及びその後荘園がその性質を変えていった戦国時代までの二つが中心であった。そのため、史料編纂所はもとより、高野山、東寺、醍醐、高雄などの寺院文書を閲覧したいとも考えていた。朝河は1年の研究休暇を2年に延ばし、関西及び九州で調査を行うが、その詳細に関しては別途論考を試みることにする。

## 坪内逍遙

さて、7月7日の午前中に三上を訪ねた朝河は、期待通り、三上より研究調査計画を12日までに作るとの約束をとりつける。史料編纂所への挨拶という最初の仕事を終えた朝河は、次に東京での滞在先を依頼してあった坪内逍遙（1859 - 1935年）を訪ねる。この時期、歌舞伎座では『牧の方』が上演されていた。多忙にも拘らず便宜をはかってくれた師の労に感謝し、朝河はそれを日記にしたためる。

翌日は坪内に招待されて『牧の方』を観る。何人もの招待客があったが、朝河は家族席に迎え入れられ、坪内夫人との歓談を楽しんだ。五世中村歌右衛門、七世市川八百蔵、十五世市村羽左衛門、二世市川段四郎、中村芝鶴、澤村源之助、二世市川左団次が出演者であった<sup>(19)</sup>。作品の感想に関しては「全体としては良くできている。最初はユーモア盛りだくさんで、最後は10人もの殺人が起こるといふ古典的な形式のものである」と記しているだけである。

坪内逍遙と朝河の出会いは東京専門学校（現早稲田大学）時代に遡るが、逍遙にとって朝河は尊敬のできる優秀な学生であった。在学中は、逍遙の主催する『早稲田文学』に論文が掲載されたこともあったし、卒業してからも文学科設置当時の話になれば、逍遙の口からは朝河の名前が出たということである<sup>(20)</sup>。また、朝河が渡米してからも師弟関係は続き、朝河は自分の研究について、また日本の政治について、世界情勢について師に意見を申し述べていた<sup>(21)</sup>。逍遙がシェイクスピアという「西洋」を歌舞伎という伝統芸能の形を借りて、日本文化の中に取り入れようと実験を繰り返していた時、朝河はその史料が国内にとどまっていた日本の封建制度を「西洋」の学会に提供する準備を着々と進めていた。双方とも伝統や文化の再生を可能とする個人の記憶というものを芸術活動の中で、あるいは歴史研究の中で欠かすことはできないと捉えていたのであろう。分野は違っても、朝河から届く西洋便りは、坪内にとって興味深いものであった。帰国する2年程前には自分宛の手紙を、勿論本人の了承を得てではあるが『早稲田学



報』(1915年11月)に掲載させている。個人的な話を公的なものにしても支障のない対話が二人の間には成り立っていたことが確認できる一例である。

その内容は、朝河のヨーロッパ旅行の報告である。朝河は1915年の夏休みの2ヵ月をイタリアで、残りの1ヵ月をフランス及びイギリスで過ごした。逍遙に便りを出したと思われるのは8月26日、パリ発である。朝河はこの雑誌記事の切り抜きを日記に貼り付けているが、単なる旅行者というよりも、冷静な歴史家の視点でイタリア人を論じ、フランス人を論じ、イギリス人を論じている。第一次大戦時のヨーロッパであり、朝河は身に危険が及ぶかもしれないと案じもしたが、戦時中だからこそ見えるものがあるはずだと考えた。「私は固より経済政治等のことを調査せん為(ため)に旅行致居るに(あ)らず、実際に伊、仏、英の三国民に(あ)触れて如何なる特色有りや、又其の文化及歴史的訓練が如何に人民日常の生活及び思想、風俗等に現はれ居るやを少しでも直接に観ん(み)為(ため)に有之、殊に戦争が右の諸点の上に如何に影響を及ぼしつゝありや、戦争が如何に此諸点を表現せしめ候やなどを觀察致度存じて参り候<sup>22)</sup>と、現地調査に踏み出したのであった。後に比較法制史家として認められることになる朝河は、この時期のヨーロッパ旅行では、イタリアやフランスで荘園の跡や歴史的建造物を見学したり、博物館員の案内で特別な文書に目を通したりしている。先に引用した三上への手紙で原史料を扱うことの重要性を示したように、ここではフィールド調査の必要性を示唆しているが、第2回目の帰朝は、これら二つの目的を満たすものであった。

## 早稲田の友人たち：哲学会

逍遙の次に訪ねたのは、中桐確太郎(1872 - 1944年)である。連絡なしで出かけたのが、中桐は外出中で、結局夫人と子供と暫く話をした後、朝河はホテルに戻った。中桐は福島尋常中学校(のち安積中学校)時代からの友人で、ジャーナリストを経た後、早稲田大学で倫理学を講じていた。朝河がダートマス大学での学びを終えてイエール大学でさらに研究者となる意志を固めた時には、書面でその報告をした一人である。その内容は、横井時

雄、徳富蘇峰、坪内逍遙、大西祝、タッカー（William J. Tucker, 1839 - 1926年）教授等による激励に感謝しているということから、両親の賛同は得られても、その老後を親戚に委ねることになる気兼ねがあること、また個人的な魂の問題についての苦悩まで、思いのたけを打ち明けたものである<sup>(23)</sup>。中桐も朝河と同様、東京専門学校に学んでおり、朝河より4年程早く世界したが生涯の友であった。

朝河が東京専門学校に入学したのは1892年の秋で、文学科が設置されてから3年目のことであった。学科を育てるのは教員の技量にかかっているわけだが、学生の能力によるところも大きい。始まったばかりの学科に、朝河らは哲学会という研究会を設立する。今で言うところのクラブ或いは同好会の類いであったと考えられるが会員の活動は卒業後も続けられた。アメリカで学者になった朝河の元には日本で出版された書物が時折、届けられた。1913年5月19日の日記には次のような記述がある。

「哲学会より『浮世絵画集』一集、二集が他の本と共に届く。哲学会は、金子、中島半次郎、中桐、島村、そして私により1894年頃結成され、後に、故網島栄一郎、紀淑雄、五十嵐力、等が加わる。会員数は未だに少なく、あまり活動的とは言えないが、まだ残っているし、これからも存続していくであろう。1906年から1907年にかけて帰朝した際に、私は新しい息吹にならんと、論文を読み議論する月例会を持とうと提案した。」

今回の帰朝においても、メンバー等は朝河の元に集まった。例えば早稻田が改革騒動<sup>(24)</sup>の最中にあった9月16日には、大学で教鞭を取る国文学者五十嵐力（1874 - 1947年）が訪ねてくる。学問について語り、個人的な問題について語る。自然と早稻田の問題についても触れることになるが、朝河の批判は、まず「根本ノ病ニアリ」から始まり、その理由として「一八、日本人ハ（汽車ノ切符ヲ買フ時ト同ジク）共同ノ活動ニ慣レズ。又個人主義モ解セズ。一八、〔稲〕門ノ人々ハ、抑遜、寛容、雅量、誠意アル君子の事ヲ壹モ行ハズ」と手厳しい。

年末には主賓として哲学会の忘年会に招かれている。12月23日の日記に

よると、三河屋という料亭が会場となり、参加者は金子、中島、中桐、紀淑雄、長谷川、五十嵐の面々であった。哲学会が朝河を交えて会食をするのは10年ぶりのことであるが、状況は前とは違っていた。というのは誰もが多かれ少なかれ早稲田騒動の渦中にいたのである。日記には「かの危機的状況に於いて他のメンバーから支持が得られなかったというのは、金子と中島にとっては気分の良いものではなかったはずだ。彼〔金子或は中島〕は理事から外れるまでその任務に耐えなければならなかったわけだから」とある。遠来の友を迎えての会食であったが、不穏な空気が漂う場面もあった。金子〔或は中島〕が、哲学会解散を暗示するようなことを言う。他のメンバーは反対した。これについて朝河は「私が最も強く反対した」と記す。朝河は、各人の関心事や共感部分は成熟しつつ変わってきているが、哲学会は存在し続けてきたし、そうあるべきだと考える。10年前と同様に、研究会を月に一度持つようにと訴える。遠くに暮らす者であるからこそ言えるのだという内容が記された一行に、朝河の謙虚さと責任感とが読み取れる。

## 日本観察

師と会い、友と語る朝河であるが、10年ぶりの日本はどのように映ったのであろうか。最初の日にはイタリア人プロスペロの目を借りて、その観察を行う。

「プロスペロは日本人やものの中に、何かしらの懐かしさを感じているに違いない。空は高く澄んでいて、道行く人々はしなやかでカジュアルである。言葉は丁寧で流れるようだ。勿論対称的な点もある。人々の生活は実態のない薄っぺらな印象を与える。というのは、家屋は今にも壊れそうだし、話し言葉は極端な程軽く、ころころと変わる。流行や衣装はきちんとしてなくてみずばらしい。」

外国人には日本はどのように映っているであろうというわけだ。直接自分がどのように感じたかを記すのではなく他者の目で、というところに、すぐには整理のつかない想いがあったのかもしれない。

しかし、平沼夫人に招かれ、三上に会い、中桐と話し、坪内夫妻の歓待を受けた朝河は、帰国から5日目の7月9日の月曜日になると、アメリカの友人に自らの印象を伝えている。朝河は手紙の一部を日記に書き写すのを常としており、次の引用文も日記に写された控えからであるが、「日本の空は高く光に満ちていてイタリアを思い出させる。ニューヘイブンのどんよりとした空、航海中覆っていた太平洋上の灰色の空とはうってかわって、解放感をもたらしてくれる」とあり、これから始まる日本での研究生活に期待感が膨らんでいる様子が読み取れる。また日本人に関して、「イタリア人同様、表情が豊で適応力があり、言葉がしなやかである。より良い暮らしを求めてあくせく働いているが、長年身に付いてきたユーモアの感覚ととしなやかさがなくなることはない」と伝える行間からは、久しぶりの日本社会の中であって、まず問題なく対処できていることが伺える。只、朝河はその心地良さの中に浸っているだけではない。日本滞在期間は限られたものであるので、今ある日本の実態を的確に捉えたいとも思っている。「この新しい時代の中で日本に欠けているものひとつひとつに、徐々に気づいていくであろう」と続ける。但し、朝河の言う「新しい時代」とは単に西洋文明を指しているのではない。朝河は船上で出会った人たちを回想する。彼らは、一旦横浜に降り立つが、また世界各国に散らばっていくのである。「日本、中国、インド、ビルマ、フィリピン、ジャワ及び他のオランダ領の島々、シベリア、ロシア、英国及び西半球」と世界一周の航路を想像させる朝河の記述は、「新しい時代」が各々の地域を意識したものになることを予感させる。

横浜港から入ってくる外国人もいれば、またそこから出て行く日本人もいる。朝河がアメリカで過ごした二十余年の間、迎えた日本からの客の数は少なくない。さすがにダートマス時代<sup>(25)</sup>はめったになかったが、イエール大学で教え始めた1907年以降は、同年11月に日米間で結ばれたいわゆる紳士協約により日本人移民の数が制限されたとはいえ、朝河を頼ってくる留学生の数も増えれば、遠路訪ね来る研究者らの数も多くなる。英文で綴る朝河の日記に日本人の名前が漢字で入ってくるのはそういう日である。朝

河が東京生活の最初の1年を過ごすことになる麹町中六番町48の住処も、遠来の客の一人、白井新太郎から提供されたものであった。

## 日本人の世話

白井は会津若松出身で、実業家として財を成し、1917年には衆議院議員になっている。朝河と初めて会ったのは1912年の秋であった。新太郎は息子の留学の相談のためにイエール大学に朝河を訪ねた。朝河は息子龍一郎をダートマス大学に推薦する。結果は、翌年正月、龍一郎の学力が十分ではないとの手紙が同大学のレイコック(Laycock)学部長から朝河の元に送られてくるといったものであった。この時期の朝河の身辺は慌ただしかった。妻ミリアム(Miriam)の体調がすぐれずサナトリウムを探すなど、落ち着くことのできない日が続いていた<sup>(26)</sup>。しかし朝河は、来客があれば迎え入れ、可能性ある若者の進路を拓くための協力は惜しまなかったのである。

白井新太郎はそういう朝河に恩義を感じていたのだろう。自著の英文翻訳、及び受験生である次男の勉強を見ることを依頼しながら、1年間無償で同邸内に朝河の部屋を準備する。朝河は月30円払いたいと申し出たが断られている。ステーションホテルから移ってきた7月13日の日記に「洋風にしつらえてあって非常に快適な住まいである」と記す。

横浜に着いて早々、自宅に招待してくれた平沼夫人の息子義太郎も朝河の世話になった一人であり、朝河の日記には、1916年4月30日に登場する。「平沼、21歳、アトランティックシティーから近藤と一緒に訪ねてくる。教育のことについて相談があるらしい」とある。それからひと月と経たない内に、平沼は再び朝河を訪ね、この時は5日間滞在する。朝河は、ニューヘイブンの小高い丘、セイヴィン・ロックまで案内したり、自分の部屋は暑過ぎるからと部屋に転がり込まれば迎え入れたり、と面倒を見る。平沼は夏休みも朝河の元にやってきて、7月20日から26日の間は、朝河及びその友人クラーク(C. U. Clark)の家族とともに、ノースハートレーのクラーク家別荘で過ごしている。

白井や平沼は学外からの来訪者であるが、イエールで学ぶ日本人留学生

や同大学を訪問する研究者たちも朝河を頼りにしていた。朝河が日本文化史担当の講師及び図書館東アジアコレクション部長の職に就いた1907年から第2回帰朝までの10年間に、イエール大学には少なくとも50名の日本人留学生が入ってきた<sup>(27)</sup>。アパート探しを手伝うこともあれば、紀元節や正月など日本の祝日には彼らを招待することもあった。日本からの来訪者に関しては、『朝河書簡集』の朝河貫一年譜を眺めただけでも、1907年には姉崎正治、翌年には黒板勝美、阪谷芳郎、その翌年は桑木巖翼、和田万吉、渋沢栄一、1910年は菊池大麓、1911年は辻善之助、1912年は新渡戸稲造、1913年は慶応義塾大学塾長鎌田栄吉、1914年は早稲田大学総長高田早苗、1915年は市川三喜、1917年は穂積重遠、服部宇之吉の訪問を受けていることが確認できる<sup>(28)</sup>。続いて「日記目録」の方を捲ると、1911年は辻善之助の他にも坪内士行、橘静次の名前があり、1914年3月は佐藤という交換教授の為に食事会を催している。同年4月にはボストンから姉崎正治を講演に迎え、夏には綱島佳吉、秋には前述の如く高田早苗早稲田大学総長及び橘が訪ねてくる。そして、1916年には服部宇之吉、近藤、平沼、大島正治、大脇という名前が読みとれる。

## 帰一協会

こういう朝河であったから、日本滞在の2年間、各方面から招待を受けるわけである。1917年7月14日には帰一協会の会合に出席している。同団体と朝河の関係に関しては、五十嵐卓の「朝河貫一の日米交流事業批判 日米交換教授、帰一協会、ニューヨーク日本協会について」があるが、帰一協会とは日本女子大学校長の成瀬仁蔵を發起人として、渋沢栄一、森村市左衛門、姉崎正治、浮田和民らおよそ30名が会員となり1912年に結成された団体であり、その目的は「西洋と東洋の思想及び宗教にある相違点を討論しあい、共通点を探り出そうとするところにあった」<sup>(29)</sup>。日露戦争後日米の対立が顕著となっていく中で、平和的交流を促進する運動が活発になり、実業家の援助を得て1907年にはニューヨーク日本協会(Japan Society)が設立され、1910年には日米交換教授の事業が始まっていたが、帰一協会

の結成もその時代の要請に応えたものであったという。五十嵐は、これらの平和的事業に対する朝河の批判的文章に着目しているが、朝河の主張は、ゆるぎない二国間関係のためには、学識を具えた者が担うべきであるというものであった。具体的には、例えば、会員の一人中島力造（倫理学者、1858 - 1918年）に宛てた書面では、「成瀬氏が持ってこられし帰一会につきて八気の毒ながら其の唱道の方法を失し候」<sup>(30)</sup>と手厳しい。但し、「一層確固のものたらしめんとの御方針ならば、只今の広告的評議員の外に厳密の選択を経たる人物を増加し、且つ臨時幹事を機を見て改造し、其上に学力と事務の方と学界の尊敬とを有する人を常任幹事とする要あるべく候」<sup>(31)</sup>との助言を添えることは忘れていない。批判はしても協力は惜しまない朝河の一面である。

帰一協会は、月に一度、上野精養軒に集まり、専門家による講話を聞き、引き続き討論を行い、その記録を印刷して会員に配布するという活動をしていたが<sup>(32)</sup>、この日は中央亭が会場となった。『最後の「日本人」』では次のようになっている。「丸の内中央亭で帰一協会の招宴。朝河講演。主催者、渋沢栄一・中島力造・服部宇之吉・増田義一・福岡秀猪、他」<sup>(33)</sup>。阿部のこの記述は英文日記目録からの翻訳であると思われるが、正確さに欠ける。この文面からだと、朝河を講演者とした宴のようであるが、日記には「5時半から帰一協会の集まりで中央亭へ。中島半次郎の講話を聞く。私も何か話すことになり、渋沢栄一も〔それに続いた。〕出席者の中には、他に中島力造、姉崎正治、服部宇之吉、増田義一、福岡秀猪らがいた」<sup>(34)</sup>とある。朝河の帰朝に合わせて開いた会合というよりも、この日の講話者は中島半次郎と決まっていた、日本に着いたばかりの朝河もそこに招待され、話をすることになったと考えるのが妥当であろう。

## キリスト教関係

成瀬仁蔵（1858 - 1919年）を初めとして帰一協会には多くのキリスト教徒が会員となっているが、朝河とキリスト教にも深いつながりがある。そもそもダートマス大学への留学が可能となったのも、朝河がキリスト教徒で

あったことが大きい。朝河は東京専門学校に入学する1892年秋、当時本郷教会の牧師であった横井時雄（1857 - 1927年）と出会い、翌年洗礼を受ける。同年、朝河をダートマス大学に受け入れ、イエール大学大学院進学に至るまで財政的援助を惜しまなかったウィリアム・J・タッカーが、ダートマス大学第九代学長に就任している。その翌年に横井はイエール大学神学院に留学するが、既にその頃から朝河の留学をタッカーに依頼していたのである<sup>(35)</sup>。タッカーの横井に対する信頼は絶大であった。「彼（朝河）自身にも興味はあるが、君の彼に対する関心の持ち様に非常な興味を覚える」<sup>(36)</sup>と、タッカー学長は朝河をダートマスに受け入れることを決め、財政的な援助をも約束する。

ダートマス時代の朝河は、夏休みになると夏期キリスト教大会に参加していた。その様子は徳富蘇峰の発行する『国民新聞』で報告されている<sup>(37)</sup>。1896年、アメリカ最初の夏休みに朝河は日本人と会えることに心躍らせながらノースフィールドの地に向かう。本大会の主催者D・L・ムーディー（Dwight Lyman Moody, 1837 - 1899年）<sup>(38)</sup>は日本人留学生からは参加費を徴収することなく、必要な場合は旅費も与えたと朝河は伝えるが、さてこの年は11名の日本人が集まってきた。米田庄太郎、坂田貞之助、中村茂策、本多庸一、杉山重義、守屋堅吾、小畑九五郎、堤久太郎、堀健、桑名伊之吉、そして朝河貫一である。「十一人が十一色にして凡夫の習ひ或は相善からざることもありしならんれども流石は同国人に候故兎も角も一見旧知の如く打とけし様に御座候」<sup>(39)</sup>と朝河は渡米してから半年ぶりに会えた日本人との快談に喜びを隠せない。朝河のこの体験は『国民新聞』に「米国ノースフィールド夏期学校に遊ぶ記」及び「米国夏期学校」として連載（7回）される。そして翌夏もまたここに戻ってくるのである。同紙には再び朝河のアメリカ報告が「学生大会に於ける日本人」として5日にわたり掲載される。行間には望郷の念が見え隠れする。「抑 外国に在る時は一刻も日本を忘ること能はず、日本の誉と恥とを悉く一身に負ひ候……されば外国にて……日本人に會して共に故郷を談ずるが如きは最大快事に候事今更言ふまでも無之候」<sup>(40)</sup>とあるように、朝河は、日本人と故国について語り



合いたいと切に願っていたのである。この年は、日本からの参加者、井深梶之助と初めて会うことになる。27カ国から代表者が集まっていたが、後に明治学院大学で教鞭をとることとなる井深はこの時、日本の学生青年会委員長として参加していた<sup>(41)</sup>。

しかし、朝河が伝えるのは個人的な感想だけではない。真摯な批判精神を込めた筆が冴える。例えば、中国伝道に携わった宣教師の演説に関しては、受け身の聞き手に甘んじることなく「支那の弊習を一々激烈に述べ去りて一も其の善き一面を云わず遂に支那には親子の間夫婦の間に至るまでも一の愛を見ずと申候」<sup>(42)</sup>と指摘し、人種偏見に満ちた報告として非難する。また、全体を通しての感想は、「ノースフィールドにて米国知名の人々の演説を聞き候ても日本青年の心となりて聞く時は何もあまり尤過ぎて少しも我等の中心に貫き来らず明煌々たる大批評的演説ともつかず大信仰的説教とも覚えず米国青年に与ふる百分の一の影響をも我等に与えずに候。ノースフィールドの大声も大歴史の上よりいふ時は蚊よりも小なる捻声に過ぎざるべく候」<sup>(43)</sup>というもので、改宗者や献身者を産み出す伝道集会にありがちな熱狂的な雰囲気やを冷静にみつめていることが伺える。ムーディー氏の风采を、明治の青年にとってはヒーローである福沢諭吉や勝海舟や西郷隆盛といった幕末の志士にたとえながら<sup>(44)</sup>、その人間性に対して尊敬の念は表わしても、無批判にこの大会を受け入れる朝河ではなかった。

それから20年後、今度は日本においてキリスト教徒の集いに出席することになるが、朝河の批判精神は衰えてはいない。大会は1917年月16日から20日まで、御殿場において催された。日本各地で任務に当たっていた200名の宣教師が風光明媚な避暑地に集まってきた。朝河は日記に次のように記す。

「会合には2、3しか出なかった。どれもうんざりするもので、関心が呼び起こされるようなことは殆どない。参加者にも気力が感じられず、思いやりや想像力すら欠けているように見受けられた。例外は無きに等しい。誠実ささえ持ち合わせていない者も多い」。

この大会がどのようなテーマで構成されていたかを調べるのは後の課題

であるが、満足のいく内容ではなかったのは確かである。失望した朝河は自らスピーチを申し出、戦争の意味について30分ほど話した。これには反響があった。さらに話が聞きたいという人も多く、大会の終わる前の日に時間を設定したが、腕時計が45分も遅れていたせいで遅刻してしまいその機会を逸した。日記には参加者として牧野憲次、マッコイ（McCoy）、ウォレン（C. M. Warren）、安川経輝、原田助、そして広岡夫人の名前が登場する。広岡夫人とは初対面であったが、話は個人的なことにまで及び、翌日は牧野を通して、安川の長女との再婚を考えてみる気はないかと聞かれた。これをかわきりに滞日中、他の人からも何度も再婚話をもってこられるが、朝河が関心を示すことはなかった。

20日、御殿場を後にし、朝河は小田原の白井の別荘に向かう。小高い丘に建つ贅を尽くした屋敷を管理人夫婦に案内される。26日まで一人で滞在する。27日はウォレンに招待され、再び御殿場へ足を運ぶ。ここも宣教師たちの修養会か、10名程の宣教師に「日本仏教と社会上級との交渉史（鎌倉中期まで）」について講演をする。ウォレンは前の年に1年間イェール大学に招聘されていた宣教師である。

さて、この時期朝河はキリスト教徒の集いに招かれ御殿場を2度訪れているが、阿部善雄による朝河伝ではこの部分の記述にも日記との食い違いが見られる。先に述べたように、最初の御殿場訪問は3泊4日で催されたキリスト教大会で200名の宣教師が集まったものであり、2回目は10人程の宣教師を相手に講演をしたと日記には記されている。しかし、阿部は「御殿場で開かれていた三百人ほどのキリスト教伝道士たちの講習会にも招かれ、『鎌倉時代中期の宗教と社会』と題して講演した」<sup>(45)</sup>と述べ、この2件を混同しているだけでなく、宣教師の数も講演のタイトルも朝河の記述とは異なる。

朝河は白井の別荘を一人で使わせてもらったが、8月4日からはひと月程、伊豆長岡にある高田早苗の別荘に滞在する。こちらも全く一人で使い、食事の世話だけ管理人の松本清一の家族がやってくれる。時にウォレンの家族と一緒に、伊豆の名所を訪ね、箱根、小田原を廻る。その間、中桐や

次に述べる坪内土行夫妻が訪ねてくる。夫妻と言っても結婚していたわけではないが<sup>(46)</sup>、朝河の日記には「妻(wife)」とあるので、これに倣う。

新学期にあわせ朝河が東京の白井邸に戻ってきたのは9月10日であった。いよいよ本格的に東京での研究生活が始まるが、朝河の帰京を待つ人がいた。その一人は坪内土行で、朝河は、土行の妻マッジとの関係、養父逍遙との関係、実父との関係について打ち明けられ、さらには早稲田を辞めるか否かという相談まで受けることとなる。

## 坪内土行

朝河の日記に土行が最初に登場するのは、1911年8月13日(日曜日)である。「午後、坪内土行が訪ねてくる。食事をして帰る」とある。土行は朝河と同じく早稲田大学文学科出身であるが、卒業と同時にハーバード大学に留学し、ベーカー教授(George Pierce Baker, 1866 - 1935年)<sup>(47)</sup>の門下生になる。逍遙は跡継ぎが国際的な演劇人となるように3年間の留学期間を準備したのであった。この時、土行は実は結婚を考えていた。自伝『越しかた九十年』<sup>(48)</sup>によると、相手は友人の妹で赤井美代といい肺結核を患っていた。これを養父逍遙に打ち明けると、反対はされなかったが、その前にこの留学が準備されていたのである。土行はこれを承諾し、アメリカへと旅立つ。しかし彼の帰国を待つことなく美代は命づきてしまう。異国で愛する者の訃報を知らされた土行の落胆ぶりは想像を絶するものであった。自伝には「日本との音信を一切断ち切って、酒、又、酒。死にもやらず、朝からのウィスキーに頭をしびれさせ、生きながら亡者の生活であった」<sup>(49)</sup>と記している。その頃、早稲田で英語を教えた内ヶ崎作三郎が旅行中に土行を見かけ、「坪内土行は墮落した」と評したということであるから<sup>(50)</sup>、傍目に分かるほどの変貌ぶりだったのであろう。朝河の日記にはその辺りのことは何も書かれていないが、9月6日の「土行、英国に出航する前の最後の訪問である」という記述から、彼が何度か朝河を訪ねたことは伺える。朝河が精神的な支えになっていたことは確かであろう。90歳を目前に控え、土行は「在米の友人たちの心からの忠告にも耳を傾け始め、日本の養父母、

実父、友人たちへの通信をも再開し、愚かさを恥じ、不孝を詫び、旧交を回復することをえて、ここに漸く心機一転、米国を去って英国へ渡り、全く新しい生活に入ろうと決心をしたのは、明治四十四年の秋であった<sup>51)</sup>と記すが、40年程前に既にこの世を去っていた朝河のことなども回想していたであろう。

士行がアメリカを発って6年余、異国の地で悲しみの淵にあった頃の自分を知る友の帰郷である。朝河との再会を心待ちにしていたに違いない。しかし、理由は懐かしさからだけではなかった。士行は今回も大きな問題を抱えていたのである。帰国から4日目、逍遙の招待を受け歌舞伎座で『牧の方』を観劇している頃か、士行とその妻からホテルに電話があった。妻とは士行がイギリスで知り合ったアメリカ人女性であるが、彼女もアメリカで朝河の世話になっている。朝河の日記には多くは語られていないが、士行の自伝と併せ読むと、朝河が二人にどのように関わっていたかが鮮明になる。そして同時に、朝河の温かい人柄を垣間見ることができる。

士行はイギリスに着いてしばらくすると、ローレンス・アーヴィング (Lawrence Irving, 1872 - 1914年)<sup>52)</sup>が率いる劇団の一員となる。端役であるが『ハムレット』及び『罪と罰』に、そして、比較的重要な役で『タイフーン』に出演した。その巡業中に出会ったのが、後に妻として紹介されることとなるアメリカ人マッジである。実際の名前は、士行の記述によると「マッグラルト・ホームズ」といったが士行はそう呼んでいた。朝河も、日本滞在中の日記にはマッジ (Mag) と記しているが、ニューヨークで初めて会った頃の日記にはミス・ホームズ (Miss Holmes) で登場する。

士行がマッジに出会った時、彼女はまだ16歳であった。士行は26歳になる直前で、ロンドンの地中座という劇場で『タイフーン』に出演していた。マッジはその劇場前の青物店で働いていて顔見知りになり付き合いが始まる。しかし、翌年第一次世界大戦が勃発。士行は帰国を決意し、マッジには故郷アメリカで再び士行と暮らせる日を待つように説き伏せる。士行は早稲田大学総長高田早苗に送金を依頼する。果たして50ポンドという大金が送られて来たが、半額を自分の渡航費に、半額をマッジの旅費に使った。

士行は彼女をアメリカに送り返すだけでなく、信頼のおける友、つまりニューヘイブン在住の朝河貫一に、手紙を書く。1915年10月19日火曜日、朝河は次のように記している。

「M・ホームズという女性から郵便が届く。坪内士行の手紙が同封されていて、彼女は婚約者であり、自分が日本に迎えられる日が来るまで力になってやってもらいたいとある。孤児だそうで、筆跡からもあまり教養はないように思われる。」

それから3日後、今度は直接士行から、彼女に財政的な面で協力を頼むとの手紙が届く。マジジ自身からもさらに2日後に便りがあり、もっと自分のことを知ってもらうためにニューヨークで会いたいという趣旨のものであった。朝河の方も家政婦の仕事でも紹介しようと、友人を当たり始めていたところであったので、慰めがてら返事を書き、会う旨を伝える。そして、10日後の11月5日の金曜日、朝河は仕事が終わると夕方の列車に乗り込む。ニューヨークでは一緒に夕食をとりながら、話を聞き、そして旧友のフラー（Fuller）氏が家政婦を探しているが、どうかと勧める。彼女は、その時4ドル50セントで帽子屋に雇われていたが、日給は3ドルと安くなって、郊外で、信頼のおける人の所で働くことに関心を示したように見えた。朝河は交通費として5ドルを渡し、見送りをすませると常宿にしていたアテネホテルへと向かう。この後、彼女と士行との間で再びやりとりがあったのは明白である。さらに10日後、朝河はマジジから、士行が100ドルを送ってよこすつもりであると聞かされ、そうであるならば家政婦の仕事をする必要はないだろうとアドバイスしている。

さて、この100ドル送金の話であるが、士行の自伝では次のように記述されている。

「私が帰朝以来、必死の勢いで書き上げた種々の原稿や、頼まれて、演出した東儀鉄笛らの劇団『無名会』の演出料などを掻き集めて、まず百ドルを送金し、もう百ドル送るまで待て、と書いてやったに拘らず、支那通いの貨物船に乗って、大正五年の正月、ついに彼女は日本へ来た」<sup>53</sup>。

このマジジとの関係は養父を激怒させ、土行は逍遙邸からついに出ることになった。こういう背景を考えると、前述の『牧の方』の公演時、歌舞伎座に土行夫妻がいない理由も分かると言えよう。さらに、日本の滞在の間、朝河は何度か土行とマジジの相談にのっている。二人の関係は決してうまくは行ってなかったからである。最終的には1918年10月10日、土行が突然訪ねてきてマジジが他の男の元に行ってしまったと告げる。朝河は口に出すことはなかったが彼にとって悪いことではないと思った。しかし同時に、マジジは精神的に弱い女性であるので身を落とさなければよいかと案じる。

土行の自伝には、「大正八年（1920年）という年は、私の一生涯中最も多事多端、しかも悲喜こもごも到るといふ、めっぼう忙しい年であったことは確かである」<sup>(54)</sup>とあるが、その理由のひとつにマジジの永遠の帰国があげられている。土行の思い出の中では破天荒な妻だが、1918年2月『ハムレット』公演の期間は楽屋で来客の世話などを甲斐甲斐しくしていたということだ。朝河も2月24日の日曜日、帝国劇場に出かけ、土行演じるハムレットを観劇しているので、その「来客」の一人であったかもしれない。劇そのものへの感想は「妃とオフィーリアがちっとも良くなかった」とあるだけで、土行の演技への言及はない。また『ハムレット』に続き『春雨傘』が上演されたが、朝河は途中で退席している。作品に満足しなかったのだろうか。否、それだけではなく、実は希望は叶わなかったが、朝河はこの場所にベラ・アーウィン（Bella Irwin, 1882 - 1957年）を誘っていたのである。5日前の日記には「ベラを坪内土行の『ハムレット』に招待するがその日は貧民街の子供たちの所に行くということだ」と記されている。このベラこそが、朝河が日本滞在中、またアメリカに戻ってからもしばらく思い続けることとなる女性であるが、マジジとはあまりにも対照的な生き方をした幼児教育家であった。

## ベラ・アーウィン

ベラと朝河の関係に関しては、石川衛三の研究に詳しい。石川は「評伝ノ

ベラ・アルウィン（朝河貴一・後年の恋人）<sup>55</sup>で、1895年は「奇しくも」21歳の朝河がダートマス大学へと留学した年であり、12歳のベラが父の故郷フィラデルフィアへ旅立った年であったと、人生をよりドラマチックなものとする偶然性の存在を指摘しているが、帰国の船上で朝河がベラの妹アグネス（Agnes Irwin）<sup>56</sup>に会ったのも「奇遇」と呼べる出来事であろう。これは日本に到着した日の日記に記されている内容だが、アグネスはバツサー大学に通う学生で、朝河の観察によると、「背が低くやや太め」であった。「日本語を上手に話す」「母親は日本人である」という記述から、言葉を交わし、個人的な話に及んだことが分かる。また、アグネスに関する描写は「父親がデッキまで迎えにくる」で終わっているのも、朝河はそれまで見守ってあげていたのかもしれない。只この時は、アグネスも父親も、そして朝河も、互いに長い付き合いが始まろうとは知る由もなかった。

朝河が最初にアーウィン家を訪ねたのは1917年11月23日の祝日であった。休みの日は天気が良ければ遠出をして自然の中を散策するのを習慣としていたが、この日はあいにくの曇り空であったため、東京に留まることにする。イエール大学のラッド教授（George Trumbull Ladd, 1842 - 1921年）からの手紙を持って九鬼男爵邸に向かったが旅行中で会えず、アーウィン家を訪ねることにした。帰国の船上でアグネスに住所を貰っていたのか、迎えに来ていた父親ロバート・ウォーカー・アーウィン（Robert Walker Irwin, 1844 - 1925年）と名刺交換をしたのか、朝河の人生の一部に深く関わってくるベラ・アーウィンの家族との対面である。この日の日記は「アーウィン氏、息子、娘に会う」で終わるが、アーウィン家には2男4女の6人の子供がいたので、この娘がベラか否かは不明である。

只、年が明けて1月16日の日記になると、ベラの名前が登場する。「アーウィン邸にて夕食会。ベラ、マリー、リチャード、母親の他に、私と他4名の招待客があった。……ベラは誠実で魅力的である」と、その印象が述べられている。

ベラが少女時代をフィラデルフィアで過ごしたことは先に述べたが、彼女は、二十代の半ばに再びアメリカに留学する。この時は、幼児教育の専

門家になるためという具体的な目的があった。1906年、朝河が第1回目の帰朝を果たした年であるが、同年の暮、再びフィラデルフィアに戻っていくのである。1910年にはローマで開催された世界日曜学校大会にも出席し、当時「新教育法」で名高いモンテソーリ女史（Maria Montessori, 1870 - 1952年<sup>57</sup>）に会う。ベラはその教育法に深く傾倒していたのである。さらに1914年には、2月から6月末までの間、ローマにおいてモンテソーリ自身から「新教育法」の手ほどきを受けている。そして、同年11月、日本に戻ってくると幼稚園開設の準備にとりかかり、1年と3ヵ月後には幼稚園及び保育者養成学校（玉成保母養成所）をスタートさせる<sup>58</sup>。

朝河自身もモンテソーリの教育法には関心があり、1913年に書いた坪内逍遙への手紙にも女史の教育哲学についての言及がある。手紙の趣旨は、早稲田大学が、学生の研究精神を育てる努力をすべきである、と外からの視点を提供するものであるが、最後にモンテソーリの思想を引用し「子供の知識欲はどのような欲望よりも強いように、人類は情熱を有す。その情熱が人間の精神を思想の支配者と成し、様々な形の隷属状態から人を解き放つ<sup>59</sup>」と締めくくっている。

片や大学教育者、片や幼児教育に携わるものであるが、二人の教育観には、一致するところが多かったのではないと思われる。朝河はベラに手紙を書き、彼女の学校を見学したいと伝える。そして、1月23日、小雪舞う中、ベラの幼稚園を訪ねることになる。この頃からベラと朝河の文通が始まり、石川によると100通近くベラ宛の手紙があるという<sup>60</sup>。朝河とベラは手紙や電話だけでなく、かなり頻繁に会っていたことも日記から伺える。アーウィン家は葉山に別荘を持っていたが、朝河は鎌倉に滞在しながらベラと葉山の海岸を散歩した。以前アーウィン家が住んでいたという玉川の田健次郎邸の辺りも一緒に歩いた。新緑の高尾山を散策し、菖蒲の季節は鐘ヶ淵を訪れた。また、朝河は自分が講演をすることがあればベラを招待し、ベラも、教会の催しや幼稚園の式典などに、たびたび朝河を誘った。

石川による朝河研究は、ベラとの恋愛に焦点をしばっているが、日本の



幼児教育に生涯を捧げることにしたベラと、自らの歴史学に真実を見いだそうと努めていた朝河との間で交わされた往復書簡からは、キリスト教という信仰を持ちつつ、公を意識した個人のあり方を探る真摯な二人の姿が見えてくる。互に贈り合った読み物の中にはエマーソン、ルボック、ペーコンによる友情についてのエッセイや、当時日本で流行していたトルストイの本などが含まれている。

### 大正時代の在日外国人<sup>(61)</sup>

朝河とベラ・アーウィンとの出会いは、滞日1年目の秋のことであったが、この時期の日記には、日本に住む、あるいは日本を訪れる外国人との交友関係が顕著である。10月26日はイエール大学で教えたフレッド・E・リー (Fred E. Lee) に夕食に招かれる。11月5日はE・W・クレメント (E. W. Clement, 1860 - 1941年) 邸に招待され、7日はリー及びウィリアム・ハイド・プライス (William Hyde Price, 1880 - 1921年) と昼食を共にする。クレメントは1887年にキリスト教パプテスト派の宣教師として来日し、当時は東京中学校 (現関東学院の前身) の校長であった。プライスはペンシルバニア州出身の経済学者で、イエール大学でも教壇に立った経験を持ち、当時は東京帝国大学で経済学や経済史を教えていた。18日は慶応義塾大学の鎌田塾長の催した目黒でのガーデン・パーティーに招待され、慶応の講師陣を紹介される。また同日の夕方出席した歴史地理学会ではロシア人の日本研究者と会い、「すぐれた学者である」と記している。

22日は暁星中学にフランス人、エミール・エック (Emile Heck, 1868 - 1943年) を訪ねる。エックはマリア会宣教師で、当時は東京帝国大学でもフランス語及びフランス文学を教えていた。朝河はフランス語の先生を紹介してもらおうとエックの学校を訪ねたわけだ。エックは一応学校の中を案内し、それからガロワ夫人 (Galloi) へ紹介状を書いてくれた。朝河はすでに2ヵ月間程、アテネフランセにて週3時間フランス語のコースを受講していたが、さらに会話力を磨きたいと思ったのであろうか、個人指導が受けられるフランス語教師を探していたのである。朝河は原史料を扱う比較法

制史家であるので外国語の知識は不可欠となるが、日本滞在の時期、ヨーロッパの法制史を研究するのにフランス語の必要性を感じたのであろう。あるいは、図書館の仕事に忙殺されることのない研究休暇だからこそ語学をしっかりと学習する時間もとれたのかもしれない。実際 1923 年には朝河の講義に「フランスの封建制」が入り、「朝河文書」の中にはマルク・ブロック (Marc Bloch, 1886 - 1944 年) などから来たフランス語の手紙も収められているところから、この時期のフランス語学習の成果はあったと言えよう。

そして、翌 23 日、いよいよアーウィン邸への訪問と相成る。ここで、ベラの両親について少し触れたい。父親ロバートは、船舶会社 (Pacific Mail Steamship Company) の日本駐在員として 1866 年に来日したアメリカ人で、ベラが誕生した時は、日本在住ハワイ公使兼総領事の任にあった。日本移民事業の開祖として「ハワイ移民の父」とも呼ばれる。産業界においては、三井物産会社の創立に参画した一人であり、共同運輸 (日本郵船の前身) の外国人支配人としても活躍する。母親は武智イキといい日本橋に生まれ、元土佐の藩士、武智惣助夫妻 (海産物商) の養女となり豊かな教養を身につけた女性であった。国際結婚はまだ時代に馴染まず、結婚に至るまで障害は多かったという。また結婚後も、子供達は排他的な子供の世界で虐めを受け、長女ベラの場合は、差別される側の苦悩の体験がその生涯を幼児教育へと向かわせたとも考えられる<sup>(62)</sup>。

さて再び時を 1917 年 11 月に戻そう。26 日は、新しく大使として来日したローランド・モリス (Rowland S. Morris, 1874 - 1945 年) を迎えるパーティーが、アメリカの大学の卒業生の主催により帝国ホテルで開かれ、朝河も出席する。翌月 1 日には、同じくモリス夫妻の歓迎会が英語協会 (English Society)、婦人外遊会 (Ladies Guaiyu Kwai)、及び、北米大学クラブ (North Am. University Club) により催され、そこで、神田男爵、添田博士、C・マッコレーイ (Clay McCauley, 1843 - 1925 年)、柳沢女史、森久保、モリス大使によるスピーチを聞く。そして、3 日エック氏から紹介されたガロワ夫人に会い、最初のフランス語会話のレッスンを受ける<sup>(63)</sup>。

朝河の交友関係が国際色豊かであることがここでも証明されるわけだが、

翌年には、フィンランド人オズワルド・サイレン（Oswald Siren）、アメリカ人ラングドン・ウォーナー（Langdon Warner, 1881 - 1955年）、イギリス人J・W・ロバートソン スコット（J. W. Robertson-Scott, 1866 - 1962年）及びチェス・ウィングフィールド（Ches Wingfield）、ドイツ人ジョセフ・ダールマン（Joseph Dahlmann, 1861 - 1930年）といった名前が登場し、1919年にはアメリカ人ジョン・デューイ（John Dewey, 1859 - 1952年）、クレイ・マッコレー、アリス・フィンレイ（Alice Finley, 1878 - 1959年）との出会いが記録されている。

ラングドン・ウォーナーは第二次大戦時、京都を空襲から守ることに尽力した日本美術研究家として有名だが、朝河と共同で行った戦争回避のための平和運動も追記すべき点である<sup>(64)</sup>。ウォーナーは1903年にハーバード大学を卒業した後來日し、岡倉天心に師事して日本美術を学ぶ。帰国後ハーバード大学フォッグ美術館やボストン美術館に所属し、美術研究及び調査に専念するが、朝河とウォーナーの知的交流関係には長い歴史がある<sup>(65)</sup>。1918年の1月31日、ウォーナーが来日した頃と時を同じくして、朝河は美術史家サイレンに会うために帝国ホテルに赴くが、そこでウォーナーと偶然出くわす。二人ともケンブリッジやニューヘイブンで会うのとはまた違った印象を持ったことだろう。朝河は「ウォーナーに会い驚いた」と記すが、時に外交的な面を発揮する朝河は、彼を日本人の研究者たちと引き合わせる。2月7日には、姉崎、黒板、松本并太郎、滝、ウォーナーと清陵亭で1人分2円50銭の晚餐会を催す。また、4月にウォーナーがハルピンに出発する前には送別会か、「牛鍋」の昼食と相成る。

3月2日には英語協会の主催による、J・W・ロバートソン スコットの講演を聞く。同氏は『英語と英国気質の研究：日英両文』を丸善から出版したばかりであったので、この新刊書についての話も出たことだろう。朝河の日記にはスピーチの内容についての言及はないが、「私はヨーロッパ文明についてもっと踏み込んだ研究がこの日本でも必要であるとコメントした」との記述がある。ロバートソン スコット邸は筆筈町67にあり、朝河は3月30日に招待されている。またこの日の招待客の中にはウォーナーと

柳田国男がいた。

イエズス会のダールマンへの言及は、わずかだが5月17日の日記に出てくる。ダールマンは1908年来日し、上智大学及び東京帝国大学でドイツ文学、インド哲学、ギリシャ語などを教えていたドイツ人宣教師であった。学生時代からゲーテ等ドイツ文学を好み、イエール大学でインド思想史も教えていた朝河であるから、お互いに知的刺激を与え合ったかもしれない。朝河はこの日、「ダールマンとこんなに長く話をしたのは初めてである」と記す。

朝河は史料編纂所で調査研究をしている学者であったので、その交友関係が主に研究者であったのは当然のことであるが、1919年は日本の哲学界及び教育界に大きな影響を与えたアメリカの学者、ジョン・デューイと面識を持つことになる。2月から3月にかけて、デューイは東京帝国大学で週2回講義を行っていたが、朝河はこれを聴講した。日記には「興味深い」というコメントが記されている。また朝河のデューイとの関係は、単に受け手としてだけではなかった。3月19日、朝河が、日本アジア協会の依頼で、慶応義塾大学において「神道を社会的観点から見ると」と題する講演を行った時、満席の会場にデューイの姿があった。また23日には朝河は、新渡戸邸にデューイを訪ね、しばし歓談し、研究に関して励ましの言葉を受けている。尚、日本アジア協会主催の講演会はこれが初めてではなかった。前の年には「日本の封建制度の側面」と題して話をし、これは出版されている。またクレイ・マッコレーは、本協会の会長を1910年から1916年まで務めたユニテリアン派の宣教師であった。

最後に、アリス・フィンレイであるが、ベラ・アーウィンと同じく、日本で幼児教育のために尽力した女性であった。1905年宣教師として来日するが、幼児教育の必要性を強く意識し、1916年鹿児島市に敬愛幼稚園を創立する。ベラが渡米や渡欧を繰り返したように、アリスも長い休暇はアメリカの大学での研究にあてた。何年か置きに、ニューヨークのコロンビア大学やデトロイトのメリル・パルモア大学で教育学を学んでいる。朝河は、離日を半年後に控えた九州方面調査旅行の際に彼女と出会う。この旅行が

朝河に「入来文書」のオリジナルに触れるという貴重な機会をもたらしたことは有名だが、朝河が地元の人たちとの交流を大切にしていた点にも少し触れておきたい。6月27日の日記には、前の晩、宿の泊まり客がうるさくて眠りが浅く疲れてはいたが一日中仕事をしたとあるが、朝河はこういう日であっても、周囲の要望には応えていた。アリス・フィンレイが主催する英語会が非常に熱心に依頼してくるので、断りきれず、史料について及び研究者としての体験談をその英語会のメンバーの前で話すことになったというエピソードが記されている。

## 別れ

2ヵ月に及ぶ調査旅行から朝河が東京に戻ってきたのは、7月20日であった。翌日から史料編纂所で研究を再開するが、最後の日は迫りつつあった。帰国の時と同様に、再び日本を離れる時も、心通う恩師や親しい友人たちとの別れの挨拶が、様々な形で繰り広げられる。8月7日は、史料編纂所の三成重敬(1874 - 1962年)を夕飯に誘い、月明かりの下、上野公園を一緒に歩く。9日の日記には「〔三成に〕涙をこらえながら別れを告げた」とある。8月19日から22日にかけては、ベラの気持ちを確認するためにか、アーウィン家の避暑地である伊香保に赴く。ホテルに滞在し、毎日アーウィン家の別荘を訪れる。この時の日記にはロバート・アーウィンが頻繁に登場する。娘の男友達を陽気に迎え入れる父として、タバコを差し出す男として、ベラと二人きりの時間を持たせようとしてくれる親として、存在感を表わす。

22日の午後、朝河が東京に戻ってくると、中桐と五十嵐が待っていた。二人は朝河を料亭に誘う。朝河も彼らと一緒にいる時間は大いに楽しんだ。料亭が閉まると、店を変え、また語り合い、二人が下宿まで送り届けてくれた時はもう夜の11時を回っていた。24日は坪内逍遙から采女町の長崎料理店に招待を受けている。

朝河は9月4日に横浜を発つことになっていたが、天候不良で出航が延期になり、そのおかげで、別れを惜しむ時間がたっぷりできた。ベラも避暑

地から戻ってきたので、4日は吾妻橋で待ち合わせ、百花園を歩く。日記には、その時を思い出として心にしまっておくつもりか「半月が出て来た。空は澄み、風が肌に心地良い。提灯がちらちらと灯り始め、人通りが多くなる。……月に照らされた川面がとても美しい」とロマンチックな情景が描かれる。6日は井の頭公園を二人で歩き、7日は新橋から葉山まで足をのばす。小高い丘に登り、もうすぐ満月だと思いながら月明かりの下の風景に臨む。10日はアーウィン邸に招待され、夕食の後、二人だけで真剣に語り合う。

11日は午前中、三上参次が別れの挨拶に来る。2年前と同様、三上と会ったその夕方、坪内逍遙の所に挨拶に出かける。しかし、帰国時の弾んだ心とは反対に、最後の面会になるだろうと自覚していたからか、涙腺が緩んだ。朝河は「涙を見せまいとした」と記している。そしていよいよ出国である。12日の朝、横浜に向かう前にベラに電話をかける。「涙で声が詰まる。電話の向こうからベラの啜り泣く声が聞こえる」とある。横浜では、船が出る前に平沼邸へ別れの挨拶に行ったが、この日も天候不良で欠航となり、昼食をご馳走になると、ネクタイ2本とカフスポタンの土産を持って、東京に引き返すことになった。

何度も欠航が続いたので13日は、横浜には向かわず、朝河は大学で仕事をすることにした。時代は悠長である。いつものように史料に目を通していたわけであるが、ついに船が出ると知らされる。東京を発ち、横浜に向かい、そしていよいよ船上の人となるのである。平沼義太郎らに見送られ、朝河を乗せた「アフリカ丸」は午後5時に出航した。日記は「穏やかな海。徐々に欠け行く月が雲に隠れている」で締めくくられているが、離日が近づいてくるにつれ頻繁に記述されるようになる月の満ち欠けの描写には、時を惜しむ朝河の心情が表わされていると同時に、日本を去り再びアメリカに戻っていくという現実は、変わる事のない自然界の規則と同様、自らを導く神の摂理であると受け止めているかのような、朝河の、その静かな決意が示されている。

## おわりに

1917年7月5日から1919年9月13日に書かれた朝河の日記を主な資料とし、特に関係が深かった人物や団体をとりあげながら、そこから見えてくる朝河の実像を捉えようと試みた。日記を付けるという習慣は朝河の時代の知識人にとっては珍しくないが、歴史家としての朝河は、自らが残す日々の記録が史料となることを自覚していた。晩年、それを整理し目録を作成したことから明白であるが、この期間に書かれた朝河の日記は彼の日本での行動を知るのに役立つだけでなく、文化や人々の習慣を伝え、また知識人及びキリスト教徒たちが深く関わりながら国際化を目指していた大正という時代を証言する史料となっている。

朝河が横浜に降り立った時、世界は第一次大戦の暗雲の中にあった。帰国の途で知り合ったイタリア人は神戸に船舶の受け取りに向かう途中の海軍将校であったし、朝河が行った講演の内容にも「戦争」が入ってきた。また船上で出会った人々、東京での生活の中で、さらには地方への調査旅行で知り合った人々は、実に国際色豊かであった。幼稚園から大学まで、その教育関係者らは、アメリカ人、イギリス人、フランス人、ドイツ人、フィンランド人と国籍が多様である。さらに朝河への講演依頼者は、大学やキリスト教会関係だけでなく、「英語」や「外」といった文字が入る、海外体験者や外国人を中心メンバーとする団体であった。

朝河が最初にアメリカへ旅立ったのは1895年であり、東京専門学校において逍遥らから英語を学んだ、まだ袴姿の明治の青年であった。それから二十数年が経ち、日本の社会にはさらに西洋文化が広まっていた。坪内士行は、逍遥の跡継ぎとして演劇人となっていたが、その体験も価値観もシェイクスピアを日本に根付かせた養父とは異なる。アメリカに学び、イギリスで劇団に入り、「国際結婚」をした第二世代は、先代の逆鱗に触れることをも辞さない。また母校も世代交代が進み、高田早苗は名誉学長に、坪内逍遥は名誉教授にと一線から退いており、学苑は「早稲田騒動」と呼ばれる混乱期にあった。親友たちもこの渦の中に巻き込まれていたが、朝河

の歓送迎会には共に集う。日記に記された料亭の場所及び名前、そして、鰻や牛鍋といった具体的なメニューの品目が時代のムードと臭いを伝える。

朝河が記録した出来事は、朝河自身及びその周囲に起こったことであり、描かれた情景は朝河個人の目を通してのものである。日記研究に対しては「プライバシーの侵害」を懸念する声もあるが、私は朝河が晩年に日記目録を作成したという事実に、これを公のものにして良いというメッセージを読み取っている。朝河の日記の公表は徹底的な実証主義者であった歴史家朝河を時代の証言者とし、その日記研究は朝河の時代と今日とを繋ぐ役目を担っていると私は考える。

(注)

- (1) 阿部善雄『最後の「日本人」 朝河貴一の生涯』(岩波書店)の出版は1983年であるが、それより30年前の1953年、ダートマス大学の1899年卒同窓生が英文朝河伝“Kan'ichi Asakawa: December 20, 1873 - August 10, 1948”を同窓会誌(ダートマス大学出版)に掲載している(拙稿「英文『朝河貴一伝』』『ソフィア』198号、上智大学、2001年夏季、で内容及びその出版にいたる経緯を紹介)。また山内晴子により鈴木喜助稿『朝河貴一伝』について調査されているが、(「朝河貴一：幼少年期の知的精神的成長』『朝河貴一研究会ニュース』No. 60, 2006年4月)本書の出版計画がもち上がったのは阿部著の出版よりも30年程前であったという指摘がある。
- (2) 朝河の没後すぐに、福島県において朝河博士顕彰会が生まれ、続いて朝河貴一著書刊行委員会が組織される。阿部善雄は『入来文書』の復刊及び遺稿『莊園研究』に当たり、遺品や残された書簡を用いながら『最後の「日本人」』を執筆し、『朝河貴一書簡集』の企画を行った。朝河貴一書簡編集委員会編『朝河貴一書簡集』、早稲田大学出版部、1991年(以下『書簡集』)の序による。
- (3) 1896年1月にダートマス大学入学以来1948年8月に没するまでハノーバー(ニューハンプシャー州)及びニューヘイブン(コネチカット州)でその生涯を送る。
- (4) 不正確。本稿にて訂正。
- (5) 不正確。本稿にて訂正。
- (6) 本稿にては、阿部善雄『最後の「日本人」 朝河貴一の生涯』、岩波現代文庫、2004年を使用。106-117ページ。
- (7) 増井由紀美「日記目録から見える朝河の歩み」、第67回朝河研究会にて報告、2005年4月16日。
- (8) Yale University, Sterling Memorial Library, Manuscripts and Archives, Kan'ichi Asakawa Papers, Group Number 40, Series No. II. 67箱のうち2箱に1900 - 1925年、1940 - 1948年の期間に書かれた日記が収められている。殆ど英語で書かれている。
- (9) 1946年1月1日の日記に、ダイアナ・ワッツは自己の葛藤を打ち明けることのできた数少ない友人の一人であるという内容の記述がある。
- (10) 日本で迎える10年ぶりの正月は平沼家の別荘で過ごした。平沼夫人におせち料理や雑煮を届けてもらい「久しぶりに本物の、伝統的な正月である」と記す。
- (11) 阿部、前掲書、107ページ。英文日記目録には“July 5, arrive in Yokohama. Mrs. Hiranuma, 義



- 太郎's mother: 徳宗形。」と場所及び人名だけで、宿泊したとは書かれていない。
- (12) 1902年学位論文“The Early Institutional Life of Japan: a Study in the Reform of 645 A.D.”によりイエール大学からPh.Dを授与される。1904年早稲田大学出版部より出版される。
- (13) 朝河貫一書簡編集委員会編『朝河貫一書簡集』、早稲田大学出版部、1991年、186ページ。
- (14) Kan'ichi Asakawa, *The Russo-Japanese Conflict Its Causes and Issues*, Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1904.
- (15) 増井由紀美「朝河貫一の講義」、朝河貫一研究会編『甦る朝河貫一』、国際文献印刷社、1998年、15-27ページ。
- (16) 『書簡集』、189ページ。
- (17) 『書簡集』、191ページ。
- (18) 『書簡集』、246ページ。
- (19) 「逍遙作品上演年表」『逍遙選集』別冊第五、第一書房、1978年、19-20ページ。
- (20) 市島謙吉の回想によると逍遙は「流石に其頃の論文は立派なもので、金子、朝河、島村の卒業論文の如きはいづれも堂々たるものであった」と語っていたという。増井由紀美「朝河貫一：明治の『国際人』」『津田塾大学紀要』第38号、2006年3月、304ページ。
- (21) 『書簡集』には坪内逍遙（雄蔵）宛の手紙（控）が12通収められている。
- (22) 『書簡集』、236ページ。
- (23) 『書簡集』、139-142ページ。
- (24) 丁度朝河が帰国した1917年夏あたりからマスコミを賑わせ始めた「早稲田騒動」は、高田早苗学長復帰派対現学長天野為之派の対立であった。尾崎士郎著『人生劇場』の「青春編」で物語的な要素が付け加えられることになったが、そもそもは大隈重信夫人の銅像建立反対に端を発したもので、教職員及び学生をまきこんだ大学改革運動となった。島善高『第2版 早稲田大学小史』、早稲田大学出版部、2002年、90-93ページ参照。
- (25) 朝河のアメリカ生活は1896年1月ダートマス大学入学から始まる。1899年卒業と同時にイエール大学大学院へ。1902年Ph.D取得後ダートマス大学講師となる。1906年1月ダートマス大学からイエール大学へ移る。尚同年2月に最初の帰国。イエール大学図書館及び米国議会図書館の依頼により日本関係図書の収集を行う。1907年8月再びアメリカへ戻り以後ニューヨークに住む。
- (26) 大学院時代に知り合ったミリアム・J・キャメロン・ディングウォール (Miriam J. Cameron Dingwall) と1905年に結婚するが、ミリアムは1913年2月、術後の経過が悪く死去。
- (27) 「エール大学日本学生名簿」Asakawa Papers、イエール大学所蔵。
- (28) 『書簡集』、67-74ページ。
- (29) 五十嵐卓「朝河貫一の日米交流事業批判 日米交換教授、帰一協会、ニューヨーク日本協会について」、朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界』、早稲田大学出版部、1993年、175ページ。
- (30) 『書簡集』、196ページ。
- (31) 『書簡集』、197ページ。
- (32) 「帰一協会 日本の思想界を統一する」<http://www.hiroike-chikuro.jp/life/15/09.htm>
- (33) 阿部、前掲書、114ページ。
- (34) 日記目録には、“invited to dinner of the 帰一協会 at 中央亭 I talk; meet 渋沢栄一、中島力造、服部宇之吉、増田義一、福岡秀猪,tc.”とある。
- (35) 影山礼子「朝河貫一の恩人 ウィリアム・J・タッカー」、前掲『甦る朝河貫一』、38ページ。
- (36) 増井、前掲「朝河貫一の講義」、16ページ。
- (37) 増井由紀美「青年朝河のアメリカ便り」、前掲『朝河貫一の世界』、29-39ページの中で

この記事を取り上げている。

- (38) アメリカ人大衆伝道者。生地マサチューセッツ州ノースフィールドに若者のためのキリスト教学校・聖書学校を設立する。朝河が参加した夏期学校はそれにあたる。
- (39) 形影生(朝河のペンネーム)「米国ノースフィールド夏期学校に遊ぶ記(一)」『国民新聞』1979号、1896年8月21日。
- (40) 形影生「学生大会に於ける日本人(三)」『国民新聞』2301号、1897年9月16日。
- (41) 同上。
- (42) 形影生「米国ノースフィールド夏期学校に遊ぶ記(二)」『国民新聞』1980号、1896年8月22日。
- (43) 形影生「米国夏期学校(七)」『国民新聞』1999号、1896年9月13日。
- (44) 形影生「米国ノースフィールド夏期学校に遊ぶ記(三)」『国民新聞』1981号、1896年8月23日。
- (45) 日記目録によると、7月16日から20日まででは、“at Gotenba (staying at 岡岡浅子) where some 200 leading Christians meet....”、7月27日及び28日は、“at Gotenba with the C. Warrens. Talk to a gathering of missionaries on religion & society till middle Kamakura era.”となっており、阿部の記述は不正確である。
- (46) 坪内士行『越しかた九十年』(青蛙房、1987年)77ページに「籍はまだ入れてなかった」とある。
- (47) 1888年から1924年までハーバード大学英文科で教える。劇作家養成、演出、実験劇などのワークショップを実施。1924年からは朝河と同じイエール大学の教授になる。
- (48) 坪内士行、前掲書。
- (49) 同上、52ページ。
- (50) 同上、53ページ。
- (51) 同上、54ページ。
- (52) シェイクスピア劇の役者として著名な Henry Irving (1838 - 1905年)の次男。
- (53) 坪内士行、前掲書、74ページ。
- (54) 同上、90ページ。
- (55) 石川衛三「評伝ノベラ・アルウィン(朝河貴一・後年の恋人) 日本の幼児教育のために一生を捧げたアメリカ二世女性の生涯」『朝河貴一 人・学問・思想 朝河貴一博士二〇周年記念シンポジウム』、北樹出版、1995年、117-144ページ。
- (56) 石川は「朝河貴一の後年を彩った女性 その哀切なる愛と傷心の日々」、前掲『朝河貴一の世界』の中でアグネスをベラの友人としているが、妹の誤りであろう。朝河の日記(1917年7月5日)には、Agnes Irwinと明記されている。
- (57) イタリアの教育者であり幼児教育で世界的影響力を持っていた。1907年ローマのスラム街サン・ロレンゾに開設した「子供の家」がモンテソーリ教育の普及するきっかけとなる。
- (58) 石川、前掲「評伝」、128-144ページ。
- (59) 坪内逍遙宛(案)1913年12月21日、『書簡集』、206ページ。
- (60) 石川衛三「朝河貴一・後年の 愛の湯仰 について」、前掲『甦る朝河貴一』、95ページ。
- (61) ここで取り上げる人物の略歴その他に関しては、竹内博編『来日西洋人名事典』、日外アソシエーツ、1983年を参照した。
- (62) 石川、前掲「評伝」、118-119ページ。
- (63) 朝河は、実際のレッスンは始まる数日前にマダム・ガロワと電話で話しているが、その時の交渉のままであったならばレッスン料は1回につき4円である。朝河は28日の日記に「4円だったら、レッスンは週1回しか受けられない」と記している。
- (64) 第二次大戦前の二人による平和運動は、「大統領親書運動」として知られているが、天皇陛下に宛てたルーズベルトの親書草案を朝河が作成し、ウォーナーがワシントンに赴き各省

庁を回り要人たちに見せた。阿部善雄著『最後の「日本人」』に詳しい。  
(65) 朝河の日記にウォーナーの名前が登場するのは、確認できた中で最も古くは1912年3月21日である。「ラングドン・ウォーナーが突然やってくる」とあり、用件は翻訳の依頼であったということなので、こういった内容からすでに面識があったことが伺える。